

鎌倉矩子 岩崎清隆 インタビュー・編集

作業療法を創る—この50年のナデシコ・サムライたちの挑戦

伊藤利之（横浜市リハビリテーション事業団）

作業療法とは何か？ それは楽しいことをしながら元気になり、生活する力を育てるもの。作業という手の仕事には、そんな力がある。

本書は、編者である鎌倉矩子氏と岩崎清隆氏のお2人が11人のゲストにインタビューした記録を整理したもので、臨床に長けたベテラン作業療法士の「生き様」を通して作業療法とは何かを探りつつ、作業療法をどう創ってきたか、これからどう創っていくかが語られている。

選ばれたゲストは、わが国に作業療法士がいない時代に作業療法を模索した人から現役の協会理事まで、年代は1931年生まれから1963年生まれ、専門分野は、発達障害、高次脳機能障害、認知症、精神障害、重症心身障害と幅広く、立場も教育・研究者から実業家と呼んでもおかしくない人まで多岐にわたっている。

インタビューは、彼らの現況、これまでどのような仕事をしてきたか、折々にどのような思いを抱いてきたか、今後したいことは何か、若い世代に願うことは何かを問う鼎談・対談形式で行われ、それぞれに読み応えがある。

曰く、「患者さんと本当に向き合って……いろいろなものを受けとめることがまず大事」、楽しさの根源は「自分で生み出す喜びですかね」。作業療法は「生活全体をどうか、環境をどうするかとか」、それができなければ「今度は代償っていうか……、それプラス作業の良さが加わる」。方法としていろいろな作業を使うけれど「作業がなせるのは問題と思われることをアート化してしまうことではないか」。「脳っていう統合機能がやられている領域がもっとも作業療法の力を発揮しやすい……作業っていうのは統合機能の問題ですからね」。患者さんに対する態度は「まず共にいる、そして侵襲性が少ないようにして自分を見せる……一緒に自然な形で作業をしながら、患者さんの心が開くのを待つ」。人と会って話すことが「好きっていうかね、人間が一番喜べる瞬間というのは、心と心というか、気持ちと気持ち

がフーッとふれ合って、フワーってとろけていったときがね、最大の喜び」。職場では「まわりに溶け込んでことを進めないと大きなものは動かせない」。学生には「やっぱりいいものを見せてあげるということ、理屈ではなく、共に働くということ……モデルを見て感動して、僕も私もそうになりたい」。そして「誰にも必ず、人生のお師匠さんみたいな患者さんに会おうときがくる」、それが臨床の醍醐味。

ゲストの話から、作業療法士としてのアイデンティティ・クライシスはまったく問題ないように感じられる。それは、パイオニアとして問題にするほど暇ではなかっただろうし、常に作業療法を追求する時代を生きてきたからではないだろうか。リハビリテーション医も同じで、治療医学と批判的に対峙しながら患者さんを診てきたからこそ、自分のなかではリハビリテーションは確かなものであり、迷いなどはなかった。それがメジャーとなった現在、訪問リハビリテーションでは「生活支援という観点からの介入はできていないし、ましてや作業を持ち込んでOTはほとんどいない」というように、裾野が延びて平ら化が進んだ結果、頂点は相対的に低くされ、再び混沌の別世界が広がっている。そんな今だからこそ、パイオニアの方々の話は重く貴重である。とりわけ制度に縛られて身動きが取れない状況にあるなか、彼らの話には初心に立ち返る感動がある。若い人たちには、そこから真摯に学び、新たな視点に立って頂点を再び高みへと押し上げてほしい。

それにしても、ゲストの選定、1年間をかけたインタビュー、それらを整理してまとめられた編集作業はハードなものだったと想像する。編者のお2人に脱帽したい。とても良い本に仕上がったのではないかと、同じリハビリテーションの世界に生きるものとして、心より感謝！

（B6判 頁486 2015年 定価3,600円＋税 [ISBN 978-4-902249-78-1] 青海社）